

## コレラの流行期に

一

先頃の戦争で中国の味方についた有力な同盟軍は、耳も聞こえず、目も見えず、従って講和条約やその後戻った平和のことを何一つ知らなかったし、今なお知らないままである。帰還する日本軍の跡を追って、戦勝国であるこの帝国を侵略し、暑い夏の間におよそ三万人も人間を殺戮した。いまだにその行為は続き、火葬の薪は絶え間なく燃え続けている。町の向こうの丘から、時々その煙が風に乗って私の庭へ匂いを運んでくることがあり、そんな時は、私くらの身体の大人一人の火葬料金は八十銭（現在の為替相場場で約二分の一ドル）であることを思い出さざるを得ないのである。

私の家の二階に上がると、小さな店の立ち並んだ一本の通りがずっと海まで延びているのを窓から見渡せる。通りのあちこちの家からコレラ患者が病院に運び出されて行くのを私はこれまで目にしてきたが、つい今朝ほど見た新しい病人は、向かいの瀬戸物屋の主人である。泣き叫ぶ家族の頼みも聞き入れられず、病人は強制的に連れて行かれた。コレラ患者を自宅

で看護することは衛生法で禁止されているのである。違反すれば罰金その他の刑が待っているというのに、人々は病人を隠しておこうとする。公立のコレラ病院には患者が溢れていて扱ひもぞんざいだし、病人の身を気づかう家族や友人達からすっかり隔離されてしまうから、というのがその理由だが、警察側も容易には欺かれず、届け出のない患者をすぐに見つけては、担架を用意し、人夫を連れて現われる。残酷に思われるが、衛生法は残酷でなくてはならないのだ。瀬戸物屋のおかみさんも泣きながら担架を追って行ったが、ついには警官に言われて、ひっそりと侘しくなった店に戻るほかはなかった。店は今閉められている。あの夫婦の手によって再び開く日は恐らく来ないであろう。

そのような悲劇は、始まった時と同じくらい急速に終るのである。残された家族の者達は、許可がおりるとすぐに、悲しい思い出のまつわる品々をまとめて姿を消してしまう。そして通りでは、まるで何事もなかったかのように、普段と同じ暮しが昼も夜も続いて行く。竿竹やざる、桶、箱などを売る行商人達がいつもの売り声を響かせながら、空になった家々の前を通り過ぎる。経典を唱えて歩いて行く僧や巡礼の声が切れ切れに聞こえる。盲目の按摩の吹くもの悲しい笛の音が流れるかと思えば、夜回りが手にした重い杖が道の敷石にぶつかって大きな音をたてる。飴売りの少年も前と変わらず、太鼓をたたきながら、哀愁のある、女の子のように優しい声で恋の歌を歌う。

二人は一緒——長いことわたしはいたけれど、いざ行くとなったら、今来たばかりのような気がしたよ。

二人は一緒——わたしは今もお茶のことを思うよ。他人の目には宇治の古茶か新茶に見えたかもしれない。けれどもわたしには、美しい山吹色をした玉露だったよ。

二人は一緒——わたしは電信技手、あなたは電報を待つ人。わたしが思いを送れば、あなたが受取る。柱が倒れても、電線が切れても、今さら構うものか、ねえ。

子供達もいつものように遊んでいる。きやつきやつと笑ったり叫んだりしながら追いかけてっこをしたり、声をそろえて歌い踊ったり、とんぼを捕まえて長い糸の先に結わえ付けたり——。戦争の苦しみを歌う歌、中には中国人の首を切るというものも、子供達に歌われている。

ちゃんちゃん坊主の首をはね

時々一人が姿を消すことがあるが、残った子供達は遊びを続ける。これも知恵なのだ。

子供一人の身体を焼くのかかる費用は僅か四十四銭である。二、三日前に、近所に住んでいた男の子が一人火葬された。その子がよく遊んでいた幾つかの小石が、今もその日なただに、その子がおいていったまま残っているというのに……。それにしても、石に対する子供

の愛着というのは実におもしろいものだ。貧しい家の子供だけでなく、すべての子供に決まって石をおもちゃにする時期がある。どんなに他の玩具があっても、日本の子供はどの子も時々石で遊びたがる。幼心おきなごころに石はとても不思議な存在にうつるのである。それもそのはず、一人前の知力を備えた数学者にとつてさえ、ありふれた一つの石ほど驚異に満ちたものはないのだから。石というのは見かけ以上のものではないかと小さな腕白小僧わんぱくこぞうが考えている——これはまさに鋭い見方である。もし愚かな大人が、そんなものは何の価値もないつまらないものだよ、などと偽りを教えなければ、子供は決して飽きることなく、石の中に常に何か新しいもの、変わったものを発見し続けるであろうに。石について一人の子供が訊ねる質問にすべて答えることができるのは、よほど偉大な人だけであろう。

民間信仰によれば、亡くなった近所の坊やは今頃冥途みやとの賽さいの河原かわらで小石を積んでいるはずである。恐らく、どうしてここには影がないのだろうかとうと首を傾かしげながら——。賽の河原の言い伝えが詩的な趣を持つのは、すべての日本の子供が小石で遊ぶ、その遊びが靈の世界でも同じように続けられるという考えが中心にあつて、それがごく自然だからである。

## 二

その羅宇屋ラウヤは、両端に大きな二つの箱を下げた竹の天秤棒てんびんぼうを肩かたにかついでよく廻つて来た。一つの箱には、太さや長さも様々の、色とりどりの羅宇竹ラウヤタケと、金属製の煙管きせるにそれらをつけるための道具が入っており、もう一つの箱には赤ん坊が、つまり羅宇屋の子供が入っていた。見るとその子は、箱の縁から顔を出して通りかかる人達にっこりほほえみかけていることもあれば、箱の中でしつかりくるまつて横になり、ぐっすり眠っていることもある。その子におもちゃをくれる人も多かったと聞くが、おもちゃで遊んでいることもあつた。その中に、奇妙に位牌いはいに似たものが一つまじつていて、子供が眠っている時も、目をさましている時も、いつも子供と一緒に入っていることに私は気がついた。

ところで先日のことだが、廻つて来た羅宇屋はもうあの二つの箱の下がつた天秤棒をかついでいかなかった。そのかわりに、商売の道具一式と子供とがちょうど納まる大きさの、小型の手押し車を押してやって来たが、明らかに特別そのために作られたものらしく、二つに仕切られていた。多分子供が大きくなったために、天秤でかつぐ素朴なやり方では重くて支えきれなくなつたのであろう。手押し車の上には小さな白い旗がはためいていて、そこには草書体で「きせる ラオカえ」、そして短く「お助けを願います」と書き添えられている。子供は機嫌きげん良く、元氣そうに見えた。そして以前にもたびたび私の注意を引いた、あの位牌に良く似た形の物もあり、それが今度は手押し車の中の子供の寢床に向かい合つた、背の高い箱にまつすぐに立ててある。車がこちらへ近づいてくるのを見ていて、不意に私は、やはりあれは間違いなく位牌だと確信を得た。ちやうどそれに日が一杯にあたつて、書かれている文字がどう見ても仏教のしきたりによるものと察せられたのである。好奇心を感じて私は、万

右衛門に頼み、すぐ替えてほしい煙管がたくさんあるから、と羅宇屋に言わせることにした。本当にその通りだったのである。まもなく車は門の前に止まり、私は見に行つた。

外国人の顔を見ても、子供はこわがらなかつた。かわいらしい男の子である。いつも人からかわいがられつけていると見えて、まわらぬ舌で何か言つたり笑つたりしながら、こちらへ腕を伸ばしてくる。私は子供の相手をしながら、例の位牌を良く見た。それは真宗の位牌で、女の戒名かいみょうが書かれており、万右衛門はその漢字を私に説明してくれた。「立派な御殿で崇敬されている身分の高い女人」の意味で、明治二十八年三月三十一日の日付がある。

そこへ、すぐ替えを頼む煙管を取りにやつた者がそれを持って部屋から出て来たので、羅宇屋は仕事にかかり、私はその顔を見た。それは中年を過ぎた男の顔で、口元には昔浮かべた微笑の跡のような、やつれた、しかし感じの良い皺が刻まれている。これは多くの日本人の顔に見られる皺で、なんとも言えぬ穏やかな諦めの表情を与えているのだ。まもなく万右衛門がいろいろ訊ね始めた。この万右衛門に物を訊ねられたならば、よほどの悪人でもなければ答えずにはいられない。いかにも善良な万右衛門の頭からは、光背こうはいのようなものが――菩薩ごとうの後光がさしているように思えることさえ時折あるほどだ。

羅宇屋は問われるままに身上話を始めた。子供の母親は、この子が生まれて二カ月後に亡くなつてしまつたそうである。今わの際に母親はこう言い残した。「わたしが死んだらその後丸三年たつまでは、どうぞこの子がいつもわたしの魂と一緒にいるようにして下さいね。」

この子を決してわたしの位牌のそばから離さないで。そうすれば、わたしはずっとこの子の面倒を見続けて、お乳もやれますわ。だって、子供には三年はお乳が要るんですものね。これがわたしの最後のお願いです。どうか忘れないで。頼みましたよ」。けれども、母親が死んでしまうと、父親がそれまでのように仕事を続けながらその上に、まだそんなに小さく、昼夜を問わず目の離せない赤ん坊まで育てようというのは、とうてい無理なことであつた。貧乏なので子守を雇うわけにもいかない。そこで男は、片時も子供を一人にせずに行ける商売を、と考へて羅宇屋を始めることにしたのである。牛乳を買つてやることはできなかつたが、男は汁粥と水飴とで一年以上も子供を育てていた。

子供は大変に丈夫そうで、牛乳がなくとも成長には少しも問題がないようだね、と私は言つた。

すると万右衛門は、ほとんど叱責しつせきに近いほど確信に満ちた調子でこう言うのだった。「それはもちろん、死んだ母親がお乳をやっているからでございませよ。牛乳など要るものですか」

亡き人の愛撫を感じたかのように、子供は小さな声を立てて笑つた。